

東京バッハ合唱団 月報

[第 681 号] 2019 年 3 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.681

March 2019

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第 118 回定期演奏会の 4 曲のカンタータについて

悩みのさなかにも 堅き望みを

大村 健二 (団員)

来たる 5 月の公演で取りあげる 4 曲のカンタータ(下の囲みをご参照ください)は、いずれも、バッハがトーマス・カントルとしての職務を忠実に果たしていた、あるいは果たそうと努力していた時期、いわゆる「ライプツィヒ時代・第 1 期」(1723-29 年頃)の作品に属するものです。

バッハの 65 年の生涯の後半(38 歳から歿年までの 27 年間)がライプツィヒ時代で、一般的には、活躍の重心の置き方によって 3 期に分けて語られます。

つづく第 2 期(1730-35 年頃)は、音楽愛好家団体、コレギウム・ムジクムの指揮者に就任して(1729 年 3 月)、世俗(教会外の)音楽や室内楽の作曲・上演に力を注ぎ、あるいはライプツィヒ市当局の上に君臨するザクセン選帝侯家(ドレスデン宮廷)の恩顧をもとめてつぎつぎに表敬音楽を書き、最終的には宮廷作曲家の称号を得るに至ります(1736 年 11 月)。

いっぽうで、職務としてのトーマス学校や教会内の仕事では当局との対立が深刻さを増し、いわゆる第 3 期(晩年の 10 年ほど)に向かって、移りゆく時代の音楽趣味との齟齬などをも含め、ますます孤立していき

ながらも、バッハ芸術の総決算に努めます。300 年後の現代から見れば、その孤高はバッハ音楽の偉大さが屹立したことの証左だったとしても、本人にとっては辛い試練だったことに違いはありません。

今回の 4 曲の内容に触れるまえに、つづく時代の困難を先取りして話題にしたのは、バッハという作曲家の精神の質を、拡大鏡をつかって覗いてみるためです。後にひかえた衝突の萌芽を、バッハはすでにライプツィヒ期初頭の数年間に、はやばやと抱え込んでいます。今回のステージを貫く総合テーマは、“悩みのさなかにも、堅き望みを”ですが、各々の作品の情緒・思想表現に、卓越した音楽的深みを供給したかも知れない、現実具体の苦悩にも想いを馳せたいと思います。

カンタータの演奏順は、ほぼ初演年代順に並びました。第 109 番(1723 年 10 月初演)と第 166 番(1724 年 5 月)の 2 曲は、カントル就任(1723 年 5 月)初年度の作、また、第 79 番(1725 年 10 月)と第 188 番(1728 年 10 月または翌年 11 月)は、それぞれ第 3 年目と第 6 年目または翌年に成立しています。ステージの構成上、祝祭的な第 79 番を大団円に据えました。

今回のチラシに全楽曲の歌い出しの句を載せましたのでご参照ください。なお HP 上の「歌詞[上演用]公開」から、全歌詞が対訳でご覧いただけます：

http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

1) カンタータ第 109 番《われは信ず わが主よ 援けたまえ》 Ich glaube, lieber Herr, hilf meinem Unglauben BWV 109

このカンタータが上演された日は、三位一体節後第 21 日曜日で、今回公演の 3 曲目(BWV 188)も同じ教会暦に当たります。バッハの教会では、瀕死の息子の救命をねがってイエスのもとに駆けつけた役人の話(カフェルナウムの王の役人、ヨハネ 4; 47-54)が読み上げられました。数年後、同一の課題からまったく異なる作品を生み出す発明の幅にも注目しましょう。

この冒頭合唱での歌詞は、〈われは信ず わが主よ、援けたまえ 信仰なきわれを〉(マルコ 9; 24 の引用)

<次回公演予告>

第 118 回定期演奏会

日時：2019 年 5 月 18 日(土)午後 2 時開演
会場：府中の森芸術劇場ウィーンホール

曲目：J.S.バッハ(日本語上演・大村恵美子訳詞)

- ・カンタータ第 109 番《われは信ず わが主よ》
- ・カンタータ第 166 番《いずこへ 主よ 行きたもう》
- ・カンタータ第 188 番《わが堅き望み》
- ・カンタータ第 79 番《神は わが光 盾》

演奏：

[ソプラノ] 光野孝子 [アルト] 谷地畝晶子
[テノール] 鏡貴之 [バス] 小藤洋平
[室内楽] 東京カンタータ室内管弦楽団
[オルガン] 新妻由加
[指揮] 大村恵美子

入場券：全自由席 3500 円(発売中)

申し込み・問い合わせ：事務局(本紙タイトル囲み内)

月報 3 月号 CONTENTS

- ・お便り「神の時はいと正し」(佐々木まり子) … p3
- ・新刊紹介：佐治晴夫 [著]、八木誠一 [著] …… p4

とつづきます。合奏を主導するホルン・ダカッチャ（狩りのホルン、の意）は、使われ始めて日の浅い楽器でした。初演に立ち会ったライブツィヒの会衆の耳には、救いを求める悲鳴のようにも聞こえたことでしょう。落ち着きどころのない合唱の主題も各声部を漂い、居ても立ってもいられない、といった心情を描写しています。つづく楽章で、動揺から主の救いの確信へと至り、終結のコラールは冒頭と同じ楽器編成によって、盤石の信頼を歌います。

2) カンタータ第 166 番 《いずこへ 主よ 行きたもう》

Wo gehest du hin BWV 166

表題は、この日（復活節後第 4 日曜日）の指定聖句：「今わたしは、わたしをお遣わしになった方のもとに行こうとしているが、あなたがたは誰も、『どこへ行くのか』と尋ねない」（ヨハネ 16；5）から取られています。弟子たちとともにエルサレムに向かう途上、イエスは来たるべき迫害と受難をなんども予告していますが、彼らは悟らない。先立つ箇所（ヨハネ 13；36）では、ペトロが「主よ、どこへ行くのですか」と尋ねていました。ペトロは、命を捨てても従うと言明するのですが、イエスの答えは、受難曲でもお馴染みの「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」でした。ラテン語訳の「クオ（どこへ）・ヴァディス（行くのですか）、ドミネ（主よ）？」が小説の表題になり、そのフィクションのなかでは、迫害のローマを逃げ出すペトロが、アッピア街道上の幻のイエスにむかって発する問いが、この句でした。

独唱バスがこの句を、頼りなげに歌い出して、曲が開始されます。「いずこへ」の問いは、人間一人ひとりの人生にむかって発せられています。

3) カンタータ第 188 番 《わが堅き望み》

Ich habe meine Zuversicht BWV 188

先述のとおり、このときの礼拝でも「役人の息子の癒し」の箇所が朗読されたことでしょう。注目すべきは、この曲の構成が、前曲 109 番で辿りついた結論（不安・動揺 → 信仰・平安）から、さらに信頼の質を深めるように書き進められた、と思われる点です。

曲はシンフォニアから開幕します。後に《チェンバロ協奏曲 二短調》BWV 1052 となる原曲の第 3 楽章が使われています。良く知られた旋律が弦合奏で響き始め、オルガン独奏が現れます。ここには不安の微塵も感じられません。つづくテノール・アリアが、〈わが堅き望み、まことなる神にあり〉とタイトルの歌詞を歌い出します、なんと！ 舞曲のリズムに乗って……。バス・レチタティーヴォ（第 3 曲）が〈祝さずば 放さず〉と、旧約のヤコブのことば「いいえ、祝福してくださるまでは離しません」（創世記 32；27。ヤボクの渡しの格闘）を引用するまでの信頼の深さに至ります。

この作品初演の前後、教会当局や市の聖職会議など

との確執が目立ちます。先に触れたライブツィヒ期後半に向かつてのバッハの葛藤が、大きくその影を落とし始めています。

4) カンタータ第 79 番 《神は わが光 盾》

Gott der Herr ist Sonn und Schild BWV 79

宗教改革記念日の礼拝のために作曲されました。冒頭の歌詞は、詩篇 84；12「主は太陽、盾。神は恵み、栄光。完全な道を歩く人に主は与え、良いものを拒もうとはなさいません」。ホルン 2 本とティンパニを伴うフルオーケストラに先導された合唱フーガが、神への賛美と感謝を歌い上げます。21 世紀の今、多くの努力により宗教対立は乗り越えられようとし、このカンタータはまったき感謝の音楽に昇華されます。

中間に置かれたコラール合唱は、冒頭と同じ編成の壮大なリトルネッロに乗って、〈感謝せん 神に〉と歌い（第 3 曲）、終結（第 6 曲）のコラールでは〈とわの自由を〉と、この日の全ステージの結論を、高々と宣言します。

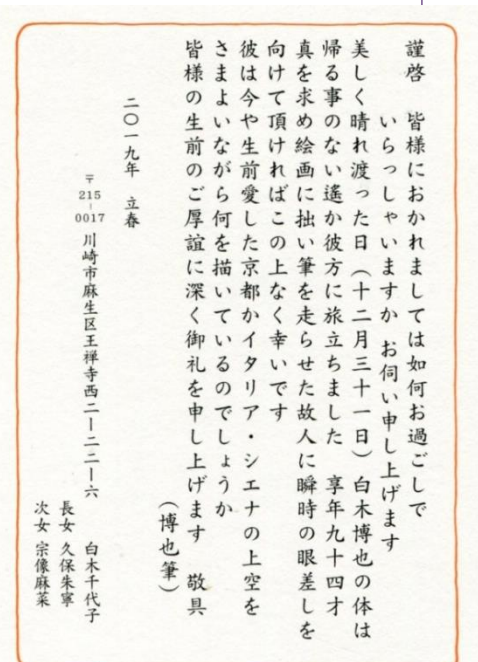
なお、この曲の冒頭合唱、第 2 曲アルト・アリア、第 5 曲ソプラノ/バス二重唱の音楽は、十数年の後、それぞれ短ミサ曲の部分として生まれ変わりました。バッハの精神のなかでは、宗教対立は、とっくに乗り越えられていたのでしょうか。

白木博也氏を送る

私たちの合唱団を、創立の当初から愛し、支えてくださった後援会員の白木博也氏から、「遙か彼方に旅立ちました」というハガキが届きました。昨年 10 月の森井眞先生白寿の集いでご一緒し、12 月の荻窪教会クリスマス・コンサート（117 回定演）にもご来場いただきました。その折の「ソリストの声で聴きたかった」とお茶目に笑いながら仰ったのが、最後の会話になってしまいました。

洋画家の白木さんは、多田逸郎さん直伝のリコーダー吹きでもあり、森井先生のフルート、大村恵美子のピアノとのトリオが懐かしい思い出です。

ハガキの表書きは、いつもと同じご本人の手書きでした。朱色の枠に、謹啓のご挨拶、周到なご準備が偲べられます。次のお便りが待ち遠しいです。(K)



神の時は いともただし

Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit

佐々木 まり子 (声楽家、団友)

先日はすてきな水仙のカードに、盛岡市民クリスマスコンサートの感想を頂戴しまして、誠にありがとうございました。大いに励まされました。また、特に演奏後の流れについて、指揮者はかわいい子供達に自分から出向いて、同労者として、“うまくいってよかったね”という意味の握手をする方がいいのではないか…というご提案に、正に膝を打って、そうだ！今年はずいぶん、そうしよう！！と心から思いました。先生がおっしゃるように、大人のクワイヤの表情が固く、お行儀良すぎて、私もどうしたらいいのかな…と思案しています。もっと心ゆさぶられながら、詩に、旋律に、押し出され、乗りながら歌ってほしいと、切に願っているところです。

私のスピーチの概要ですが、今回は子供の曲が前半4曲、後半3曲と、今まで最多の曲数となり、それなりに仕上げるのに苦労しました。年齢も6歳から16歳と幅があり、注意点もちがうのですが、あえて、それぞれの年の子1人1人が気持ちを込めて、なお自然に心地よく歌うことを最優先して、大人の(私の)視点での音楽の整え方をしないように心がけました。それによって子供達の10年の年齢幅がある中で、伸び伸びと心も身体も解放されていることを実感しながら、そして大人のクワイヤも同じプロセスを通して成長した者として、神様からいただいた“声”という賜物が重なり合うことで、皆が大きな喜びに包まれるんだ…ということ、今回の演奏の練習過程で、とても新鮮な驚きで実感いたしました。

また、カンタータ BWV106 全曲を日本語訳で演奏することに至った経緯ですが、プログラムを決めようとしていた頃、メンバー全員よく知っている方(87歳)の葬儀が5月下旬にあり、その方は“自分の葬儀の時、カンタータ 106 番を流してほしい”と奥様にお話しなさっていました。その方は主人【佐々木正利氏】の指揮しているバッハ・カンタータフェラインのバスパートのメンバーとしてバッハ作品を多く歌っていらっしゃいました。葬儀はお寺でいただきましたが、お坊さん方のご理解もあり、しかし時間的制約もあるものから、2曲目の合唱、アルトのソロ(私が歌いました)、そして最終曲の合唱のみを演奏いたしました。私自身なんとか、その方の希望がかなえられないだろうか——カットした部分の歌詞こそが、その方の愛された理由なんじゃないだろうか？——と、その方から「宿題」をいただいたような気持ちがぬぐわれませんでした。そして、教会の音楽部の集まりの時に、クリスマス用カンタータの候補も出しながらも、106番への思

いを“クリスマス用じゃないんだけどね……私の心から離れないのよ！”と打ちあげましたら、メンバーから“いいじゃないですか、イエス様の誕生は十字架へつながっているんだから、クリスマスに演奏してもちっともおかしくないですよ！”と、私のゆらいでいる気持ち、恐れている心にカツを入れてくれて勇気を与え、押し出してくれました。バッハがこの曲を作曲した時は21歳頃、今の大学2、3年生でしょうか……。こんな若い時に、こんなにも成熟した音楽を作り上げるバッハのすばらしさに、改めてびっくりさせられます。

以上のことが私がお話しさせていただいた内容です。先生が訳された106番全曲が、アンケートでも聴衆の方々に深く届いたようでした。

5月18日の定演[東京バッハ合唱団の第118回、府中の森芸術劇場]では、すばらしい4曲のプログラムですね。きっと皆さん楽しみになさっていることでしょう。先生もお体、充分ご自愛くださって、コンサートに向かわれますようお祈りしております。

皆様にも、どうぞよろしくお伝えくださいませ。

2019. 1. 26

カンタータ第106番

《神の時は いともただし》

Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit

訳詞：大村 恵美子

1. ソナティーナ

2a. 合唱

神の時は いとも ただし。
主に 生き はたらき、われら
あるなり。 (使徒行伝 17:28)
み心の ままに 定められたる
時、われら 死す

2b. アリオゾ(T)

主よ 悟らせたまえ、われらに
死すべき ことを。われら 死
に 聡(さと)からしめよ

(詩編 90:12)

2c. アリア(B)

なが 家を 整えよ;なんじ 死
にて 世を 去ればなり

(イザヤ 38:1)

2d. 合唱とアリオゾ(S)

古き 定め: ひとは 死すべき
なり。 (外典シラク 14:18)
しかり 来ませ 主イエス

(黙示録 22:20)

3a. アリア(A)

なが み手に 委ねまつる
わが 魂を。
あがない主 まことの 主よ

(詩編 31:6)

3b. アリオゾ(B)とコラル(A)

われと ともに きょう な
んじ 天つ国に あるべし

(ルカ 23:43)

われは 去りゆく
安らかに
こころ 慰められ
しずけく
主 われに 告げぬ
死は 眠りと なれり

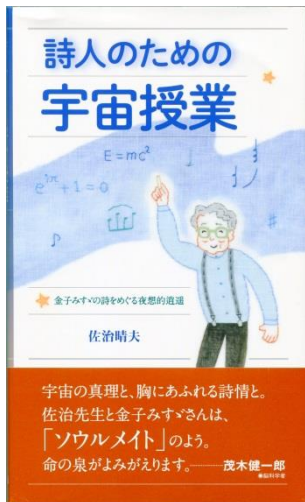
(M.ルター「平安と喜びもてわれ行かん」“シメオンの頌歌”
1524 第1節)

4. 合唱

み栄え ほまれは
父と 子なる 神に
きよき み霊に
われらに
勝利を たもう
イエスにより アーメン
(A.ロイスナー「主に望みいだ
げば」1533 第7節)

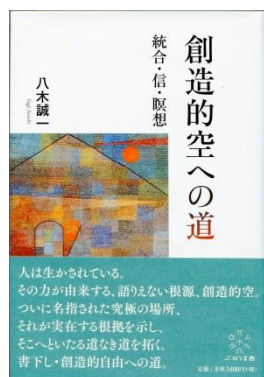
(※訳詞中、ゴティック表記は「コラル」)





新刊紹介、二冊

大村 恵美子



佐治 晴夫 [著]

『詩人のための宇宙授業』

金子みすゞの詩をめぐる
夜想的逍遙

JULIA出版局、2018年12月14日発行、本体2000円

まさにクリスマス・プレゼントそのものと言えるような、愛らしいご本が、北海道・美瑛の佐治晴夫様から届きました。全109頁の偶数頁には、金子みすゞの詩40編、奇数頁には、著者の理論物理学者の心で捉えた、1つの詩ごとの解説。全512編から選ばれた40編が、心くばりのゆき届いた装丁（とりわけ私には、1編ごとにふさわしいカラフルな刺繍絵が暖く、かわいらしかった）に装われて、さぞや著者のご満足はいかばかり……と、にっこりしてしまいました。

じつは、解説の中にも多く触れられている宮澤賢治のことは、私も小学校時代に、大好きな担任の先生から丁寧に教わり、その後、成人するにつれて、賢治のひとりよがりの面も大きいな、と一部批判的になったのですが、金子みすゞは、1983年に遺稿が発見されて以来、大好評となり、私もかなり気に入って味わいました。何故かやさしそうな表現でも、根は理屈っぽく、私にはどうも合わないという気がしたのです。今回も、佐治様の愛情溢れる解説・感想を拝見して、まず佐治様の理学的な見解に目が開かれ、そして、私よりも素直な心の人には、そう感じられるのかも、と、近寄れるような気にもなりました。他人を立てて、自分はあとに、という姿勢が、正しくはあっても、いつも落としどころがそこに狙われているようだ、と、「まあ良い子だこと」と皮肉まじりになりそうになる。例えば松尾芭蕉の句などは、彼が地べたに生えている植物を見ても、無意識に世界観・宇宙観がそこに反映されるような自然さが感じられ、それこそがホンモノ、と思われるのです。これは、私自身の小ささなのでしょうから、この佐治様のご本を、お手本にして、心を練り直さなければ、と反省しています。

いずれにしても、同時代人が揃ってまっ白な新年を迎え、そこに足跡を残そうとするこの時点に、最適なご本を読むことが出来て、やはり永生きはありがたいと、またもや痛感しました。(2018年12月29日)

八木 誠一 [著]

『創造的空への道 統合・信・瞑想』

くう
ぶねうま舎、2018年10月25日発行、本体3400円

2018年10月上旬、30年ぶりほどに八木誠一様と再会し、近々結論的な本を発行すると伺って、さっそく注目していたが、あいにく極度の多忙スケジュール最中で、やっと長い冬休みに入った12月末に、読むことが出来た。八木様にとっての最重要な著となるご本のようなので、心して精読しようと構えていた。八木様の著書は、どれも難しいとの評判だが、意外にもこれは本文262頁、論述も真っ向から一直線に畳み込むような筆勢で、ちっともくだくだしい迂回や飛躍など感じられない、私にはすっきりとした読後感の味わえるもので、うれしかった。

〈〔これで〕伝統的キリスト教批判を含む私の研究は、私なりに一応完結したことになる〉とあとがきに書いておられる著者は、本文中でしきりに「無心」「やさしいところ」「きよらかなところ」「平和への願い」「真実を求める」「無意味に耐える」等の、山上の垂訓の解釈をちりばめ、原始教団が見たイエスの姿を典型として示す。

〈これらの「ところ」は自我が努力して自力でつくり出すものではなく、統合心から生まれてくるもの、つまり与えられて現実化するもの、したがって自我からいえば、現れ発見されるものであって、自我が生み出すものではない〉(p. 224)

〈イエスは、「神は正しい者にも不正な者にも、善人にも悪人にも、等しく太陽を昇らせ雨を降らせる」と語り、無条件の赦し・受容を説いた〉(p. 233)

〈……以上は、「単なる自我」の努力でできることではない。ところが「平和への願い→無心」という道を辿り、さらに「創造的空」（「場としての自分のところそのもの」と超越的な「神」という、二重の意味でのそれ）へという道が辿られたときに成り立つことである〉(p. 234)

八木氏は、人類の現状を憂いながら、私たちに、嘆くばかりでなく、——坐禅なども積極的に奨励したりして——、自ら行動に及ぶことを期待しておられる。

〈この世界は、統合など眼中にない自我中心的な個と個、個と統一、統一と統一とが争って、勝利と支配を求める場である〉(p. 240)

〈伝統的キリスト教会は真理への忠実を称して保身に陥り、自己改革の能力も意欲もなくして、消滅に瀕しているではないか〉、〈創造的な宗教の革新、宗教的眞美の探求と実践が——見通しは甘くはないが——いまほど求められている時はないと思う。科学と技術を手にした単なる自我の文明は、人類を滅ぼしかねない。宗教の復権は、人類の将来を左右する鍵になるだろう〉(p. 241)

《われは信ず。わが主よ援けたまえ、信仰なきわれを》という、矛盾表現そのものの聖句（マルコ 9；24）のカウンタータ（BWV109）から歌い始まる、私たちの第118回定期演奏会の曲目練習が、新年早々の課題となったいま、まことにタイムリーな読物が現れたことに、私は只ならぬ感謝をおぼえている。